

〈私の研究〉

護法童子信仰の研究と私

— 宗教史研究における調査の重要性 —

小山 聡子

大学二年生の冬、歴史学の世界の魅力にはまり、様々な研究書や史料を読みあさっていた。そんな時、日本中世史が専門の山本隆志先生にお借りした本が、藤田経世・秋山光和『信貴山縁起絵巻』（東京大学出版会、一九五七年）である。私は、この魅力的な本を一気に読み終え、絵巻の中に描かれているなんとも不思議な姿をした護法童子に強い興味を抱いたことを、いまだに鮮明な記憶として留めている。これが護法童子と私との出会いである。

護法童子とは、高德な僧侶への給仕や、寺院を守護する役割を持つ信仰上の子どもである。とりわけ平安時代末期以降の縁起、説話、物語、絵像、彫像等には、護法童子を多数見出すことができる。護法童子は、今日想像するよりも、中世の信仰において実に重要な意味を与えられて盛んに信仰されていたのであった。それにもかかわらず、護法童子信仰の研究は、それまで本格的には行なわれていなかった。なぜならば、従来の宗教史研究では、本尊への信仰ばかりが着目され、本尊の脇に侍る童子についてはほとんど研究されてこなかったからである。それによって、護法童子への信仰も着目されてこなかった。このようなことから私は、卒業論文、修士論文、博

士論文において、本尊の脇に侍る童子や、護法童子についての研究を行ない、その信仰の重要性を指摘してきた。博士論文は、若干の改訂を加えて『護法童子信仰の研究』（自照社出版、二〇〇三年）として出版した。

さて、現存する護法童子像の多くは、博物館や寺社の蔵の中に、それが護法童子であることを気が付かれもせずに眠らされていた。宗教史研究にとっては、実際に信仰対象とされた絵像や彫像の調査は、不可欠である。護法童子信仰は、特に天台宗の信仰と関わりが深い。それゆえ、大学四年次から、比叡山やその北側の葛川といった地域を中心に歩いて回り、護法童子像及び護法童子に関する文字史料の調査をした。調査に行けば行くほど、護法童子信仰への興味もわいた。かつて護法童子が信仰されていた地に足を踏み入れていると、信仰の雰囲気を感じすることもできた。寺社や博物館の方々は、口を開けば「護法童子の史料を拝見させて下さい！」とばかり言う不躰な小娘に、惜しみなく大量の史料を見せてくださり、大変親切にご教示下さった。

大学院時代も、引き続き護法童子信仰の調査に行くのが私の大きな楽しみだった。日本学術振興会の特別研究員に採用されたおかげで、有り難いことに費用を気にせずに思う存分調査に行くことができた。護法童子の信仰がありそうだと思う場所には、よく考えもせずに即座に手紙を出し、気がついたら現地を歩いていた。指導教官だった今井雅晴先生も、少し目を離すとすぐにどこかへ行ってしまう弟子を見て、さぞかし呆れていらっしやうに違いない。それでも先生は、暖かく見守って下さっていた。

大学院の二年目の時のことだっただろうか。護法童子の石碑を探して比叡山の山中を歩きまわり、すっかり道に迷ってしまったことがある。途方に暮れていたところ、上原行照大阿闍梨に偶然お会いした。上原行照大阿闍梨は、千日回峰行を達成されたことで著名な方である。一人で山の中で何をしているのか、とお尋ねになられたので、護法童子信仰の調査をしていて道に迷ったことをお話した。上原さんは、私が珍しい研究をしていることにご興味をお持ちになり、現在の回峰行における護法童子信仰についてもご教示下さった。この時に最も印象的だったのは、上原さんの目である。上原さんの目は、透明に澄みキラキラと不思議な光を発していた。信仰について考えさせられた。

その後、比叡山や葛川へ調査に行くと、なぜか毎回のように上原さんに偶然にお会いした。上原さんは、「小山さんはいつも比叡山の中にいるんですか？」と、くすりと笑いながら仰った。もちろん私は、比叡山の中に住んでいたわけではない。本当に不思議な縁である。

このような縁もあり、二〇〇七年一〇月、千日回峰行を行なっている行者さん（星野円道氏）の堂入りに何う機会を頂戴した。千日回峰行の中でも、九日の間、断食・断水・不眠・不臥で修行を行ない続ける堂入りは、とりわけ難関な荒行である。私は、九日目の満行の日に比叡山に伺った。

あまりの凄まじさに圧倒された。夜中の一時、僧侶と信者さんによる不動明王の真言が遠くから聞こえてきて松明と提灯のぼんやりした明かりが近づいてきた。そして、お水取りに向かう星野さんが渾身の力を込めて杖を握りしめながらゆっくりと私の前を通り過ぎ

て行かれた。「神聖な雰囲気だった」などという安っぽい言葉では、とても表現できない。

その後、堂入りのニュースがテレビや新聞で取り上げられているのを目にした。私が翌日に手にした新聞には、星野さんが助僧に両脇から抱えられて堂から出て来られた写真が掲載されていた。そこには、「堂入り直前↓堂入り終了後」と書かれており、それぞれ顔の拡大写真が載せられていた。「堂入り終了後」のお姿は、痩せこけて目がくぼんでおり死相が現れていると言っても良い。ただしこの写真の星野さんは、私がこの目で拝見した星野さんと同じではあるけれども、同じではなかった。この写真からは、強固な意志や切実な信仰心というものが全く感じられなかったのである。やはり、自分の目で見て耳で聞いて肌で感じないと何も分かったことにはならない、ということなのであろう。まさに、「百聞は一見に如かず」である。

信仰の力というのは、文字や言葉、まして写真なんかで簡単に伝えられるものではない。常々、宗教史の研究をするにあたっては、実際にその場に行ってその土地の雰囲気を感じなくてはいけないと思っていた。千日回峰行の堂入りに行き、それは間違いではなかったと確信した。いくら史料を読んでも分からないことは山ほどある。宗教史研究は、机の上のみで完結するような学問では決してないのである。

現在まで、護法童子信仰の研究を通して、言い尽くすことができないほど多くのものを得ることができた。中でも、調査先でのことは、忘れがたい。初心を忘れず、今後も護法童子信仰及びその周辺の信仰についての研究に取り組んでいきたい。